

#### 四 遠く海を見つめて（ああ須田訓導<sup>※くんどう</sup>）



志布志湾に面した柏原海岸<sup>かしわばる</sup>は、きれいな弧を描いた海岸線で、国定公園にふさわしく、真っ白な砂浜がどこまでも続き、松林とともに風光明媚<sup>ふうこうめいび</sup>な所である。この柏原海岸の松林をぬけた所に、遠く海を見つめる一人の青年の銅像が建っている。柏原小学校の故須田<sup>すだ</sup>久徳<sup>ひさとく</sup>先生の銅像である。柏原小学校は海岸から約一キロメートル離れた高台にあり、須田先生は、柏原に生まれ、この柏原小学校で学んだ。師範学校卒業後は隣町の串良小学校に五年間勤務し、その後、一九三七年（昭和十二年）四月、母校である柏原小学校に赴任<sup>ふにん</sup>してきた。何事にも一生懸命に打ち込む、やさしいお兄さんのような先生で、六年生を担任して郷里の子供たちの教育に全力を傾けていた。

一九三七年六月二十八日、この日は長い間降り続いていた雨が止んで、とても暑い日だった。放課後六年生の児童二十人程が、「海岸に遊びに連れて行ってほしい。」と言ってきた。最初の

うちは須田先生は断っていたのだが、あまりにもしきりにせがまれて、とうとう海岸に行くことにした。海岸に行くことを他の先生に伝え、子供たちを連れて海岸に向かった。海岸に向かう間、須田先生は子供たちに航空機の話や貝殻かいがらのことなどをおもしろく話して聞かせた。

海岸に着くと、子供たちは靴を脱ぎ捨て、われ先にと波打ち際に走って行った。須田先生は子供たちの遊びを見守りながらも貝殻採集をし、珍しい貝殻を見つけると子供たちに名前を教えていた。須田先生は理科が専門で、特に貝殻の採集には興味をもち、陸産貝の新種『オオスミウロコマイマイ』を発見したほどだった。そのうち、砂浜の照り返しの暑さに耐えかねた子供たちは、「先生、水泳をしたい。泳がせて。」と、口々に言い出した。須田先生は、潮の流れや波の状態などを調べてみたが、柏原海岸としては珍しいほど静かな波だったので、水泳を許すことにした。まず、子供たちの前に立ち、自ら指揮しきをとり準備運動としてラジオ体操をさせた。次に、心臓マヒを起こさないようにゆっくり海に入り、急に飛び込まないことなど海に入るときの注意をした。子供たちが「先生は泳がないのですか。」と尋ねると、須田先生はにこにこしながら「僕はここで君たちの見張りをしているから、危ないときは大声で呼びなさい。」と返事をした。それを聞くと、子供たちは歓声をあげて海へ入っていった。「おーい、みんな、あまり沖へ行くんじゃない

いぞ。みんな離れないように気を付けろ。」先生は再度大きな声で注意した。ところがいつの間にか、貝拾いに来ていた一、二年生の子供たち三人が、六年生の一行に加わって泳ぎ出していた。しかし、須田先生はそのことにはまったく気付いていなかった。

須田先生は、焼けつくような熱い砂の上に立って、沖を見つめて子供たちの遊ぶ様子をにこにこしながら監視していた。そのうちに泳ぎに飽きた子供たちは浜に上がって来て、須田先生の周りに集まり、寝ころんだり、冗談を言ったりしていた。また、貝を拾って来て名前を聞いたりする子供たちに、須田先生は一つ一つ丁寧ていねいに教えながらも、泳いでいる子供たちの様子を見ていた。ところが突然、「しまった！」と、須田先生は叫び声とともに海に走り出した。子供たちが泳いでいた別の場所に、波間に見え隠れしながら三つの小さな頭が、ぐんぐん沖へと流されているのを見付けたのだ。あの一、二年生の子供たちだ。須田先生は走りながら靴を脱ぎ捨て、子供たちが「先生、帽子は！時計は！」と叫ぶので、帽子と時計を陸に投げ上げ、海へと入っていった。そして、浜辺の最も近くで波間にもがいている子供をすばやく抱き上げ、陸の近くまで押し上げた。そして、また、全速力で残りの二人を助けるために沖へと泳いでいった。二人目の子供を脇に抱え陸に上がった。そのときはもう須田先生はくたくたになっていた。「あと一人だ。もう一



人も助けなければ。」とまた、沖へと引き返した。その頃には、この事態に気付いた地域の人々が救助船などを出していた。須田先生は体にびったりとくつつくシャツを海の中で脱ぎ捨て、三人目の子供を救助するために懸命に泳いだ。だが、ズボンに着ているし、潮の流れのため体の自由がきかなかった。体力も限界だった。でも、子供の命にはかえられない。（ここでくたばってなるものか。）須田先生は最後の力をふりしぼり沖へと泳いだ。体が鉛なまりのように重く感じた。（このままでは自分も溺おぼれてしまう。もうあきらめようか。……。いや、そんなことはできない……。）あきらめかけた気持ち<sup>か</sup>を断ち切り、再び懸命に泳いだ。「おい、しっかりしろ。」最後の一人を抱え、陸へ向かい泳いだ。もう、手足の感覚もなくなり意識も薄れていくようだった。救助船が駆けつけ、二人の近くにゆっくりと寄って来た。「おい、きばれ。もう、大丈夫だ。」船の上から手が差しのべられた。須田先生は両手で抱えるようにして子供

を海中から高く差し上げ救助船に手渡した。しかし、その瞬間、須田先生はぐったりと力尽き、吸い込まれるように海中に沈み、再び自力で水面に姿を現すことはなかった。

五、六人の六年生の子供たちが、海でのことを知らせに学校に駆けつけて来たが、何をどう話していいか分からない。そして、今にも泣き出しそうな声で、学校に残っていた先生方に「須田先生が海にへいやった。」と知らせた。「なに、須田先生が。」先生方の顔の色がさっと変わった。病院に走る人、海岸へ走る人、まごつく人。学校は大騒ぎになった。どこからともなく集まって来た人が浜を埋めつくし、船が二、三隻出で須田先生を捜していた。一刻も早く須田先生を捜し出さなければいけないと口々に話していた。そのうち船から海面をすべるようにして網が下ろされ、引かれ始めた。網がぐんぐん浜の方に近づくと、「やあ、ここに居られた。」と叫ぶ声があった。大人四、五人に重そうに抱かれて浜に上げられた。あちらこちらで悲しい泣き声が聞こえる。子供たちも泣きながら須田先生の所に走って来て、大声で先生の名前を呼んだ。あんな元気な須田先生が、さっきまでにこにこ笑っていた須田先生がと思うと、もう一度先生の顔を見たくてならなかったのだろう。「先生、もう一度返事をしてください。目を開けてくださいい……。」子供たちみんなが心の底から叫んだ。手当てを行っていた医者に、「もう駄目

だ……。残念ですが。」と言われたとき、言葉は消え、今まで必死にこらえていた涙がみんなの目からあふれ出た。

翌日、学校葬が行われた。須田先生の遺影は、あの苦しんだ様子もなく、微笑みさえ浮かべているように満足した表情で、安らかに眠っているようだった。その姿を見て、だれもが強く心を打たれ悲しみの涙を流した。その後、須田先生をたたえる歌もでき、翌一九三八年には校庭に銅像が建立された。この銅像は、後の太平洋戦争で軍需物資の生産のため供出されたが、戦後再びこの銅像の再建の話が持ち上がり、一九六九年六月二十八日、須田先生殉職ゆかりの地である海岸の、かつての思い出の海を見下ろす地に再建された。



須田訓導殉職

須田先生の命日の日に、孫を連れとおばあさんが須田先生の銅像の前に立っていた。「こんなすばらしい先生に出会えたことを、わたしは誇りに思うわ。」そう言うと、松林で拾った松ぼっくりを銅像の足下に置き、遠く海を見つめる須田先生の顔を、しばらくの間、懐かしそうに見上げていた。今日も、柏原海岸には静かに波が押し寄せている。

※訓導……先生のこと